

# 日本語は誰のものか

## —「私の日本語」を支える言語能力—

小林 ミナ<sup>1</sup>

### キーワード

社会的な営み 言語類型論 習慣的な意味・用法 能動的・動的な言語能力

### 1. はじめに

日本語教育が育成すべき日本語能力とは何か。本稿では、この問いについて、言語とコミュニケーションの観点から考察する。結論を先取りして言うなら、本稿で考える「日本語教育が育成すべき日本語能力」とは、「自分の日本語生活をメタ的にとらえることにより、「私の日本語」を自ら構築できる能力」である。

本稿の概要は、次の通りである。

言語は社会的な営みである。それゆえ、「普通の日本語」「日本人らしい話し方」といったものが存在するかのような誤解に結びつきやすい（2節）。そして、この誤解には、日本語の特徴が影響している可能性がある（3節）。この誤解を解くためには、そこでいう「社会」とは何か、そこに言語の使い手としての「私」がどう位置づけられるのか、という2点を考える必要がある（4節）。それらの議論を踏まえて、本稿で考える日本語教育が育成すべき日本語能力、および、日本語教師に求められる文法教育力について述べる（5節）。

### 2. 社会的な営みとしての言語

言語は社会的な営みである。ここで社会的というのは、言語には「その社会の成員の間で共有されている、習慣的な意味・用法が存在する」という意味においてである。

習慣的な意味・用法は、一般的には「文字通りの意味」「辞書的な意味」に置き換えられることがある。たとえば、日本語の「しばいぬ」という名詞には、「日本犬の一品種。小形・短毛で耳は立ち、巻尾。（以下略）」（『広辞苑 第六版』、岩波書店）といった習慣的な意味・用法がある。「走る」という動詞には、「勢いよくとび出したり、す早く動きつづけたりする意。（以下略）」（同）といった習慣的な意味・用法がある。

習慣的な意味・用法を持つのは、名詞や動詞だけではない。たとえば「ありがとう」には、「感謝したり、お礼を言ったりするときの表現である」といった習慣的な意味・用法

がある。プレゼントをもらったときに「ありがとう」と言えば、素直な感謝と解釈してもらえるが、大事なワイングラスを割られたときに「ありがとう」と言うと、皮肉や非難のように解釈される。たとえ皮肉や非難に解釈される場合があるとしても、そのような解釈が生まれるメカニズムを説明するためには、「ありがとう」に習慣的な意味・用法があることを、まずは認めなければならない。なお、このような解釈にまつわる一連の現象は、「含意 (implicature)」「間接発話行為 (indirect speech act)」などと呼ばれ、Grice (1975)、Searle (1975) をはじめとする数多くの先行研究がある。

習慣的な意味・用法は、統語的、構文的な面にもみられる。「Aが料理を作った。それをBが食べた」という事態を描写する際に、「AがBに料理を作ってあげた」と言うのと、「BはAに料理を食べさせられた」と言うのでは、「Aの料理の腕前」「Aの態度」「Bの気持ち」「それらに対する話し手の認識」などさまざまな面について、異なる意味が表現される。

ここまで述べてきた内容についていえば、「日本語を学ぶというのは、日本語が持つ習慣的な意味・用法を知ることであり」という言い方は正しい。

その一方で注意しなければならないのは、「習慣的な意味・用法が存在する」という言語の社会的側面は、ときとして「普通の日本語」「日本人らしい話し方」といったものが存在するかのような誤解に結びつきやすいという点である。具体例をあげる。日本語の「おはよう」には、「その日の朝、初めて会ったときのあいさつである」という習慣的な意味・用法がある。これが、いつの間にか「日本語では、朝、誰かに会ったときに「おはよう」と言うのが普通である」「日本人らしい朝のあいさつは「おはよう」である」「日本では、朝、誰かに会ったら「おはよう」と言われなければならない」といった思考にすり替わってしまうという危険性である。

### 3. 日本語の特徴とは何か

言語が社会的な営みであるというのは、言語一般にいえる特徴であり、とくに日本語だけに固有のものではない。そこで、この3節では、個別言語としての日本語の特徴について考えてみたい。

日本語について、次のように言われることがある。

- (1) 日本語は、他の言語と異なり述語が文の最後にくる。だから、最後まで聞かないと肯定か否定かがわからない。
- (2) 日本語は、世界でも特殊な言語の一つである。だから、外国人が日本語を習得するのは難しい。

角田 (1991) は、130 の言語を対象に語順に関する調査を行っている。その調査結果 (角田 1991: 265-290) を見ると、主語 (S)、他動詞 (V)、目的語 (O) の基本的な並び順が、日本語や韓国語のように「SOV」である言語は 51 であるのに対し、英語や中国語のように「SVO」である言語は 41 であることがわかる (両者を足しても 130 にならないのは、両方が基本的であったり、「VSO」が基本的であったりといった言語があるからである)。つまり、他動詞文という限定つきではあるが、日本語の語順は類型論的にみて決して珍し

いものではない。さらに角田（1991）では、語順だけでなく、格、名詞句、他動性などさまざまな観点から考察を行い、それらの結果を踏まえて「結論としては、日本語は世界の諸言語の中でごく普通の言語である」（角田 1991：2）と述べる。

言語類型論の研究成果を見る限り、個別言語としての日本語には、日本語だけが持つ固有の特徴、特殊性といったものはほとんど見いだせないということである。

一方、城生・松崎（1995）は、日本語の特徴として次をあげる。

- (3) 政治的境界区分である国家・国民と、言語の話し手がよく一致しており、かつ、話し手の数が非常に多いこと (城生・松崎 1995：30)

そして、「[国内でその言語の話し手の占める比率]を縦軸にとり、「言語使用者全体の中で国民が占める比率」を横軸にとる」（城生・松崎 1995:31）という方法で、次の図を作成している。

どの言語よりも、右上方に位置する日本語は、平たくいえば「日本に住んでおり、日本語の話し手である人の割合」がどの言語よりも高いということになる。

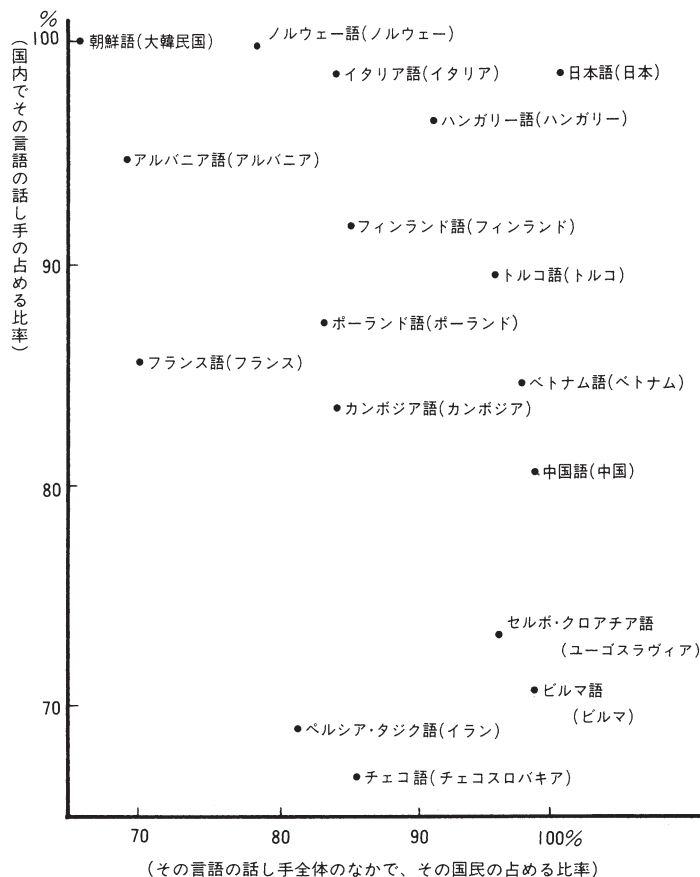


図 言語話者と国民の関係

(城生・松崎 1995:32。図表番号は本稿にあわせて削除した。)

これはもちろん、言語としての日本語の特徴ではない。しかし、社会における日本語がこのような特徴を持っていることは重要である。なぜなら、このような特徴ゆえに、「日本語の話し手であること」「日本という国に住んでいること」「日本国籍をもっていること」の三者が渾然一体となり、「日本語を学ぶというのは、普通の日本語を知り、日本人らしい話し方ができるようになることである」といった思考や信念を、さらに強固なものにしている可能性があるからである。

#### 4. 「社会」と「私」

ところで、「言語は社会的な営みである」といったときの「社会」とは何か。そこに言語の使い手としての「私」は、どう位置づけられるのか。

3節で、社会における日本語が持つ特徴について述べた。そして、「日本語の話し手であること」「日本という国に住んでいること」「日本国籍をもっていること」の三者がほとんど重なることにより、こと日本語について「社会」という場合、国家、国民としての「日本国」あるいは「日本人」が想定されやすいことを指摘した。しかし、現代においては、たとえば「韓国人とブルガリア人が、台湾で日本語を使って話をする」「トルコ人とブラジル人が、日本語のメールをやりとりする」といった光景は、決して珍しいものではない。そこでのやりとりに、「日本国」あるいは「日本人」が入り込む隙間や必然性は、まったくない。

このような事例が示唆することは何か。それは、「言語は社会的な営みである」といったときの「社会」を、「日本国」あるいは「日本人」から引きはがし、「いま、ここにいる、コミュニケーションの当事者としての私たち」であるにとらえ直すべきではないかということである。

「社会」をこのようにとらえるなら、その中心には、言語の使い手としての「私」が常に位置づけられる。日本語でコミュニケーションを進めていくというのは、当事者としての私たちが、お互いの日本語がどのような習慣的な意味・用法を共有しているかを、常に敏感に察知しながらやりとりしていくことだと言うことになる。

同時に、お互いが共有している習慣的な意味・用法があるからこそ、それにあえて逸脱することによって、「見せたい自分」「ありたい自分」を表現することもできる。2節で、「おはよう」には「その日の朝、初めて会ったときのあいさつである」という習慣的な意味・用法があると述べた。既によく知られている例ではあるが、マスコミ業界などでは、仕事現場に到着したときのあいさつとして、朝かどうかに関わらず「おはよう」が用いられるようである。この言語事実は、マスコミ業界という「社会」では、「おはよう」の習慣的な意味・用法において、朝かどうかがそれほど重要でないことを示す。「マスコミ業界は日本語が乱れている」「マスコミ業界の日本語は普通の日本語と違う」ではなく、どのような「社会」を想定するかによって、そこで共有される習慣的な意味・用法は異なるととらえるべきであろう。さらに、そのような習慣的な意味・用法は理解した上で、「私はマスコミ業界で働いているが、業界用語を使うほどこの世界に染まっていない」という自分を見せたいために、あえて「おはよう」を使わないという選択肢もありえる。

このように、私たちは、お互いが共有している習慣的な意味・用法を踏まえつつも、2節で触れたような「含意」を運んだり、また、それにあえて逸脱することによって、「見せたい自分」「ありたい自分」を表現したりしている。

## 5. 日本語能力と文法教育力

このような見方に立ったとき、日本語教育が育成すべき日本語能力とは、いったいどのようなものになるのだろうか。

まず、コミュニケーションの当事者として、いま自分が置かれている社会がどのような習慣的な意味・用法を共有しているかを知る必要がある。最初のきっかけは、日本語辞書にある意味や用法、日本語教科書にある例文、あるいは、たまたま耳にした歌詞の一断片かもしれない。それらを自らの言語生活で経験する具体的な事例を通じて、日々、検証したり更新したりしていく。そのためには、自らの言語生活をメタ的にとらえられる必要がある。そこで想定されているのは、教科書の文法記述や教師の文法説明を理解、暗記し、運用するといった、受動的・静的な言語能力ではない。

どのような日本語生活を送っているか、送りたいかは、言語の使い手一人ひとりによって異なる。したがって、検証や更新のプロセスも内容も、一人ひとりによって異なる。その結果として、それらを積み重ねることによって構築される「私の日本語のルール (= 文法)」の体系も、一人ひとりまったく異なるものとなるはずである。ここで想定されているのは、周囲の日本語をリソースとして取りこみながら、頭の中に「私の文法」「私の日本語」を自ら構築、更新していく能動的・動的な言語能力である。

以上の議論をまとめると、日本語教育が育成すべき日本語能力とは、「自分の日本語生活をメタ的にとらえることにより、「私の日本語」を自ら構築できる能力」と言うことができる。

日本語能力をこのように定義すると、教師の役割も変わってくる。従来の受動的・静的な言語能力観に基づく実践にあつては、日本語教師に求められていたのは、既存の文法書を読んで（理解力）、覚える（暗記力）という静的な文法教育力であった。そこでは、文法書、指導参考書の内容は、読んだり覚えたりしなければいけない対象として位置づけられる。しかし、ここで述べた能動的・動的な言語能力観に基づく実践では、日本語教師に求められるのは、目の前の学習者の頭の中で起きていることを知り（洞察力）、自らが持っている文法知識、言語分析力を駆使し（瞬発力）、相手に届くように伝えられる（説明力）という動的な文法教育力である。既存の文法書、指導参考書は、読んだり覚えたりする対象ではなく、洞察力、瞬発力を鍛えるためのトレーニングの1リソースとして位置づけられるようになる。

## 6. おわりに

本稿では、日本語教育が育成すべき日本語能力とは何かという問いについて「言語とコミュニケーション」の観点から考察してきた。そして、日本語教育が育成すべき日本語能

力とは、「自分の日本語生活をメタ的にとらえることにより、「私の日本語」を自ら構築できる能力」であると主張した。

そのような日本語能力観を踏まえた教育実践の一例として、筆者は早稲田大学日本語教育研究センター「テーマ科目」として「わたしのにほんご」プロジェクト1-2」という日本語授業を開講している<sup>2</sup>。以下、シラバスから「講義概要」を引用する（ルビと英訳部分は省略）。

「教科書の日本語は、みんなが使っている日本語とちがう」「教科書には、私が使いたい状況がない」と思ったことはありませんか。「わたしのにほんご」プロジェクトは、「日本語で話したいこと／書きたいこと」「日本語がうまく使えなかった経験」を持ち寄り、「わたしのにほんご」をたくさん増やしていく授業です。

■ 「文法」や「語彙」からではなく、「わたしの状況」からスタートします。

■ その状況で、どう話すか。どう打つ<sup>3</sup>かを考えます。

「わたしのにほんご」プロジェクト」では、上記のような日本語能力の獲得を目的とし、教室を「教室の外のコミュニケーションをメタ的にとらえ直す場」と位置づける。この教育実践の詳細、具体的な事例については、稿を改めて論じたい。

## 注

- 1 こばやし・みな（早稲田大学大学院日本語教育研究科・教授）
- 2 この授業は、同時に大学院日本語教育研究科の実践研究（5）の実習科目でもある。実際に授業運営は、実践研究（5）の受講生である大学院生（通称「たまご先生」）が行っている。また、2010年度は1-2レベル（いわゆる初級レベル）を対象に開講しているが、この実践は、どのレベルでも展開が可能である。
- 3 ここでいう「打つ」とは、携帯電話やパソコンキーボードなどを使った「文字言語のアウトプット」全般を指す。学習者の日本語生活では、手で書くことよりも携帯電話やキーボードを打つ機会のほうがずっと多いことから、あえて「打つ」と表現した。

## 参考文献

- ウェイリー、リンゼイ・J.（著）、大堀壽夫、古賀裕章、山泉実（訳）（2006）『言語類型論入門一言語の普遍性と多様性―』岩波書店
- 小林ミナ（2009）「教室活動とリアリティー」小林ミナ、衣川隆生（編著）、水谷修（監）『日本語教育の過去・現在・未来 第3巻「教室」』凡人社、94-118
- 城生佰太郎、松崎寛（1995）『日本語「らしさ」の言語学』講談社
- 角田大作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation, In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and Semantics, Vol.3: Speech Acts*, New York: Academic Press, 41-58.
- Searle, J. (1975) Indirect speech acts, In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and Semantics, Vol.3: Speech Acts*, New York: Academic Press, 59-82.